槍刺相愛

Ray

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
槍刺相愛

【Ｎコード】
Ｎ５９２１Ｐ

【作者名】
Ｒａｙ

【あらすじ】
弓道部所属の高校１年生・神門透子。同じく弓道部所属の２年生・早塚佑人。
しかし早塚家と神門家は主従の関係にあった。槍使いの神門家に生まれた透子には、いつも憎まれ口を叩く先輩（彼女アリ）を護る義務が発生……！？

第一刺　「動物園の孔雀は羽を広げてくれるなんてサービス精神旺盛ではない」

私はもう、誰も傷付けたくないんだ。
だから安心して、先輩。私はあんたのこと、絶対好きにならないから。
あんたのこと一生護ってやるよ、この天狼槍（シリウス）に懸けてさ。

第一刺　「動物園の孔雀は羽を広げてくれるなんてサービス精神旺盛ではない」

「あーあ、もう12月かー……。」
1年9組の教室で、気だるそうに机に突っ伏しているのは神門透子（みかどとうこ）（16）。地元の中堅校、四方南（よもみなみ）高校に通う1年生である。
「あんた、またそんなこと言って……先月も先々月も同じこと言ってたじゃない。」
透子にめんどくさそうに返事したのは、彼女の友人樋口茜（ひぐちあかね）である。
二人は弓道部に所属している。ちなみにこの高校の弓道部はとりわけ強くはない。二人ともただ何となく始めただけである。
「ほら、部活行くよ！」
ずるずると透子を引っ張るように、茜は教室を出た。それほど急ぐ時間でもないのだが、時間に几帳面な茜は誰よりも早く弓道場に着くのである。

「あー、眠い……。」
更衣室でも相変わらずの透子を一瞥して、茜はため息をついた。
「あんたねえ、眠いのはわかったから。10秒前に聞いたんだけど、それ。」
さっきから、かれこれ5回は聞いている。透子はとことん面倒くさがり屋なのである。自分でも呆れるほど。
「だって今日体育あって疲れたんだもん。」
半開きの瞼で、こちらまで眠くなるような声で、のろのろと透子は言い訳する（こいつは人を眠くさせる天才だろうか）。今日あった保健の授業を思い出して、これは合理化と言うんだったか、と茜は復習した。
「体育なんて週3時間あるでしょうが。チョコあげるから起きろ。」
パッと透子の目が輝く。まったく食い意地の張った娘だ。そこが憎めないんだけどさ。

茜はポイッとチョコレートを投げた。
「ないすきゃっち。」
そう言った時には、透子は既に包みを開けていて、まったくこういうときには素早いもんだと逆に感心させる。
「ほら！食ったら行く！」
なんだか悔しかったので、まだ他の部活仲間は着替えているというのに、茜はスタスタと透子を引っ張っていった。
「いつもの光景だねえ。」
同じく弓道部員の佐伯晶（さえきあきら）は微笑んだ。

「あんたもさあ、彼氏とか作ったら？そしたら、もうちょっと外見も外面も良くなるんじゃないの？」
割と本気で心配している茜は、割と本気でそんな提案をした。
「……別に興味ないもん。イイ男いないし。」
本当にどうでもよさそうな口調で透子は答える。
もったいないなあ、と茜は思う。
透子はとびきりの美少女ではないが、けっして顔は悪い方でもないし、極端に成績が悪いわけでもない。運動もそこそこだし、スタイルは……胸が痩せている以外には特に申し分ない。ものすごくぐーたらだが。
（まあ、イイ男がクラスにいないってのは同意するけどさ。）
「そんなことより寒いねー。早く道場行こうよ。」
12月ともなると、やはり外は寒い。暑がりで寒がりの透子は、大股に歩く。この地域は、冬寒く夏暑い。
「……そだね。」

続

第一刺　「動物園の孔雀は羽を広げてくれるなんてサービス精神旺盛ではない」

神門透子（みかどとうこ）
１６歳／誕生日８月１２日／身長１５９ｃｍ／体重４５ｋｇ
四方南高校１年９組の弓道部員。
とても面倒くさがりな性格で、ズルして楽するためなら手段を選ばない、怠惰人生まっしぐらの少女。
神門家の一人娘。槍使いで、後に早塚家の嫡男・佑人を護るハメになる。
愛器はシリウス。

第二刺　「だいたい男はエロ大魔人」

「なになに？透子サマ彼氏まだできんの？」
突然、二人の後ろから声がかかった。二年生の早塚佑人（はやつかゆうと）だ。
「……せんぱい。」
透子は男子、とりわけ早塚には結構冷たい口調で喋る。彼女のクセなのかもしれないが、女子に優しく男子に厳しい。そのせいか、彼女は部活内の男子からは「女王様キャラ」としてからかわれ……いや、恐れられている。早塚もその一員で、透子を「サマ」付けして呼んでいる。
「どーしたのー？彼氏できなくて悔しいの？」
いかにも見下すように笑いながら、早塚は透子をからかう。無論、冗談であるが。
早塚は人をおちょくることに生き甲斐でも感じているのか、デリカシーのない発言をよくする。
「……だから、別にいらないって言ってるじゃないですか。」
一重の目を細めて、いかにもうざったそうに透子は答えた。だが、早塚は負け惜しみと受け取ったらしい。
「まあ頑張れって。そんな貧乳でもいいって言ってくれるヤツがいつか現れるよ。」
透子は引きつった笑みを浮かべて、早塚の腹を小突いた。これもまた、いつもの光景である。

「先輩は彼女いるもんね～。」
道場のシャッターを開けながら、茜は先ほどの会話を蒸し返した。
早塚は的を準備しているので、聞いていない。
「ああ、深雪（みゆき）先輩ね。」
上村深雪（うえむらみゆき）。弓道部の二年生で、早塚とは一年の頃から付き合っているらしい。

「あんたも先輩にバカにされて悔しくないの？」
茜は横目で、透子の反応を窺う。
「別に～？恋人がいることだけが幸せじゃないでしょ。」
思いのほか反応が芳しくないので、茜は少しがっかりした。
「……そりゃそうかもしれんけどさ……。」
「もういいでしょ。」
透子はもう十分、というように会話を切り上げた。

「……ただいま。」
日が沈んで真っ暗な時刻に、透子は帰宅した。
透子の自宅は、少しだけ大きめの古い家だ。庭では犬が、透子の帰宅を喜んでいる。
「おかえり、透子。話があるから来なさい。」
今日に限って仕事から早く帰ってきていた母親が、いつもと違う雰囲気で透子を迎えた。
げ、と透子は思った。こういうときは絶対に良い話でないことを、彼女は知っている。日頃勉強していないことを叱られるのか、それとも……―

「透子、神門家は従者の家であることを知ってるね？」
「え……？いや、まあ……。」
詳しくは知らないが、と付け加えることを透子はしなかった。
「明日、主の家……早塚家のご嫡男が１７歳になる。……わかるね？」
ああ、ついにこの日がやってきたのか。透子はげんなりした。やはり良い話ではなかった。
「神門家は早塚家の血を護る。……そんくらいの覚悟はしてるよ、かーちゃん。
私が嫌でも毎日槍ばっか振り回してるの、知ってるでしょ。」
早く宿題片付けたいなあ、なんてことを頭の隅で考えながら、透子

は答える。
「……明日は、ご挨拶に行くから。」
はいはい、と軽く返事をして、透子は部屋を出て行った。
「……大丈夫……なわけあるか……。」
とりあえず、母親は娘に任せることしかできなかった。我が娘ながら、感心するほどいい加減だ。

ドサッとナイロン製のスクールバッグを放り、透子は着替え始めた。
「早塚家のご嫡男ねえ……。」
透子は、主の家はおろか、自分の家のことすらあまり詳しく知らなかった。
神門家と早塚家は、古くから（どれくらい前からなのかは知らない）主従関係にあった。なんでも、神門のだれそれが早塚なんとかサマにご恩を受け、それ以来子孫は皆早塚家の者に従う、なんて馬鹿げた取り決めを行ったらしい。まったく、はた迷惑な話である。ナニ時代だよ。
「んなもん一代限りにしとけっつの。ムカつくご先祖様だぜ。」
そんなことを言いながらも、透子は緊張で一杯だった。早塚家の嫡男に、未だ会ったことがないのである。名前すら知らない。
「どんな人かな……。」
不安がこみ上げてくる。命懸けで護ることとなるからだ。
「それはそうと、“早塚”か……。」
まさかそんなベタな展開、と、不意によぎった考えを切り捨てる。そんなことはあってはならない。
「ぐーぜんぐーぜん！……ま、アホ塚先輩よりかは性格イイと助かるんだけどね。」

しかし、透子の悪い予感は的中していた。

続

第二刺　「だいたい男はエロ大魔人」（後書き）

早塚佑人（はやつかゆうと）
１７歳／誕生日１２月１２日／身長１７９ｃｍ／体重６６ｋｇ
デリカシーのない、先輩の風上にも置けない二年生。一年女子に「太ったな」だの「ブサイク」だの言うことが趣味。彼女は深雪。
顔良し・頭良し・運動神経良しと三拍子揃っているが、性格だけは悪い。
早塚家の嫡男で、透子に護られなければならなくなる。

第三刺　「バレーボールは腕を痛めさせる天才」

『誕生日おめでとう』
１２月１２日の午前０時。可愛らしいデコレーションメールが、佑人のもとに届いた。彼の恋人・深雪からのものである。
ありがとう、と無難な返信を送って佑人は携帯を閉じた。彼は疲れていた。
なんでも、明日から「家来（っぽいもの）」ができるなどという、現実感の欠片もない話を延々されたからである。
そう、彼こそ主の家・早塚の一人息子であった。
「“神門”か……。」
神門などというアホみたいに珍しい苗字の人物など、彼は一人しか知らなかった。彼もまた、透子と同じく「まさか」と考えているのである。
「まあ、仮にアイツだったとしても、なんか驚くのは悔しいからな……。バッくれるか。」
佑人は確信を持った末、諦めたようだ。
「今日から忙しくなんのかなー……。」
そんなことを考えているうちに、佑人は眠りに就いた。

透子は今日、部活を休んだ。そして、佑人もまた部活を休んだ。
「……うあ、どうしよ。めっちゃ緊張する……。」
いつもの尊大な態度も消え失せ、透子は冷や汗をかいている。脈打つ音が、とても大きく聞こえる。
ここは日没頃の早塚家の屋敷、その応接室だった。
早塚の家は広く、近所の人からも、「御殿」だの「お屋敷」だの呼ばれている。
今日、透子は早塚のおぼっちゃんに謁見するためここを訪問したの

だ。
「粗相のないように、透子。」
「母ちゃんも簡単に言うよね。私が日頃敬語を使い慣れてないことくらい知ってるっしょ？」
透子の表情は固い。心なしか、声が若干震えているように思える。

そのとき、透子はある気配を感じた。
禍々しい妖気。
「え、もう！？……母ちゃん、ご嫡男にご挨拶するより先に、仕事があるみたい！」
先ほどのまでの緊張の面持ちはどこかに吹っ飛んでいったらしい。
透子はすくっと立ち上がると、堅苦しいスーツの上着を脱ぎ捨てた。
「……ちゃんと片付けて、早く戻ってらっしゃい。」
母はため息を吐いて、娘の上着を畳んだ。
了解、と返事をして、透子は部屋を出た。

《ああ、これが早塚の血のニオイ……。さて、早塚の坊ちゃんでも探すか……。》
不気味な容姿をした怪物が、早塚の敷地へ入ってきた。腹を空かせているその怪物は、迷うことなく佑人の部屋へ向かった。

バリバリと音を立てて、障子が破れた。
佑人にははっきりとその姿が見えた。
よだれを垂らし、不気味に笑みを浮かべる怪物が。目はギラギラ光り、牙を剥きだしている。
「……あれ、俺って霊感あったっけ？」
恐怖で足が竦む。ウソだろオイ。
人生においてこれほど絶望した瞬間はないだろう。ああ、俺って誕生日の今日が命日？
《お前が早塚の血の主か……。うまそうなニオイがする……。》

不協和音のような声が、脳に直接響く。なんだよコレ。
化け物がガバッと襲い掛かるその瞬間。
透子の跳び蹴り(ライダーキック)が怪物にクリーンヒットした。

早塚家の嫡男としての佑人と、臣下としての透子の、出逢いの瞬間である。(こんなんでいいのか、ヒロインよ)

派手な音を立てて、怪物が転がる。
「ふー、あっぶねー。
大丈夫ですか、ご主人サ……あ。」
主人の方に顔を向けた透子は、複雑な表情をしていた。
しまった、という顔。
なんでアンタが、という顔。
無事だったか、という顔。
「……せんぱい……。」
だらだらと冷や汗が流れる。それなのに顔が熱い。
「お……おう。」
絶対に驚かない、と決めていた佑人も動揺を隠せていない。
気まずい空気が流れる。佑人の部屋だけ南極のようだ。
しばしの無言空間を打ち破ったのは、怪物の呻き声だった。
《ぐ……貴様……!》
怒りを露わにした怪物が、むくりと起き上がる。
「そういえばコイツの存在忘れてた……。」
くるりと怪物の方を向くと、透子はポケットから銀色のナニかを取り出した。小ぶりのブローチのような物だ。
「めんどくせーけどやるか……。先輩、下がっててくださいよー。」
とても主人への態度には思えないが、一応彼女は佑人を護らねばならない。神門家の跡継ぎの宿命。
「お、おい透子サマ……どうすんの……?」
佑人も、主人としての威厳は皆無である。

「もっぺんブッ飛ばしてくるよ。」
二カッと笑うと、透子は飛び出した。

続

第三刺　「バレーボールは腕を痛めさせる天才」（後書き）

シリウス（漢字表記：銀天狼槍）
透子の相棒。銀色の細身の槍で、穂は菱型の刃が十字になっている。刃の根元には、輝くシリウスをモチーフにした星型の装飾が施されている。
通常は装飾部分のみを残して小型化しており、透子の懐に携帯されている。
値段はウン十万する高級品なので、透子はものすごく大事にしている。

第四刺　「時間が過ぎるのを早く感じたり遅く感じたりするのは、アレ実は地球

『もっぺんブッ飛ばしてくるよ。』

……ああ、これは悪い夢だ。俺は何も見てない聞いてない。透子（アイツ）サマは通りかかっただけなんだ。

なんて思えたらいいのになあ。

17歳になってイキナリこんなんじゃあ、先が思いやられるぜ。誕生日“おめでとう”だ？めでたくねえよ。

「こんな先輩の風上にも置けないサイテーな奴だけど、一応私のご主人様だ。タダじゃおかねーよっ！」

びし。と指をさして宣言する。なあ、俺って“ご主人様”だよな？

透子がピンッと星型のモノを指で弾くと、機械仕掛けのように、ジャキリと音を立てて刃物が現れた。まるで星から刃が生えるように。

くるりと向きを変えて、銀星は落ちながら柄を伸ばす。そう、それは槍だった。

金属でできているような、佑人の身の丈ほどある白銀の槍を透子は軽々掴んだ。ソレ、相当重いんじゃないのか？

「オラァいくぞバケモノ！！」

巻き舌気味に透子が叫んだ。（相変わらず口の悪い後輩だ。）槍を携え怪物に立ち向かう。

鋭い爪を武器に、怪物は透子（じゃまもの）を排除しにかかる。ああ、こんなおぞましい光景見ていられないぜ。

ナニがおぞましいって、透子サマの顔だ。眉間に皺を寄せながら笑ってやがる。般若面か。

ドッ、と怪物の手に槍が突き刺さる。

《ぐあああああ！！？》

なんとも表現し難い悲鳴が、ガンガン脳に響く。もう少し控えめに

痛がれアホ。
槍穂は結構デカい。しかも物騒なトゲトゲの刃物だ。見てるだけでこっちも痛い。
しかし透子は容赦ない。素早く槍を引き抜いて、トドメを刺しにかかった。
実力差は歴然。だが、最期の抵抗とばかりに、怪物は反対の手で透子をはたく。
「透子サマ！？」
佑人は、彼女が吹っ飛ばされた方を部屋から覗き込む。
彼女は槍の柄で衝撃を和らげ、見事な着地を決めていた。うーん、１０点！
「じゃ、まあ初仕事完遂ってことで。」
眉間に槍を突き立てると、怪物はとにかく変な色の砂っぽいものになった。こんなアブない家来持ちゃったよ、俺。

「――というわけで、不束者ですが、よろしくお願いします。」
引きつる頬を無理矢理上げて、なんというか……グロテスクな笑顔だぞ、透子サマ。
三つ指をついて中途半端に恭しく挨拶する透子を、佑人は直視できなかった。もちろん雰囲気はとてつもなく気まずい。
「できたお嬢さんをお持ちですね、神門さん。息子をよろしく頼みましたよ。」
「ええ、もちろん。」
親同士は構うことなく、勝手に話を進めている。俺、今日からどうなるんだろう。
「――それでは、今日から透子さんはこの家に住むことになるからな。佑人、仲良くしとけよ。」
「……ああ……はっ！？」
ちょっと待て、冗談じゃない！これ以上何があっても驚くまいと思っていた昨日の俺の決意をどうしてくれるんだ。

「何言ってるんだ。これから毎日お前はヤツらから狙われるんだぞ。最低1年は透子さんに」
「1年ん！！？」
ついこの間までブサイクと言ってからかっていた後輩と一緒に1年も住むだと？なんで俺この家（早塚）に生まれたんだよ！
「まあ、そういうことですから……。よろしくお願いします、せんぱ……じゃねーや、ゆ、佑人様。」
精一杯皮肉を込めたつもりであろう妙な作り笑いで、透子はもう一度深く頭を下げた。
（こんな物騒なヤツと一緒に住めるか！！）

続

第四刺　「時間が過ぎるのを早く感じたり遅く感じたりするのは、アレ実は地球

樋口茜（ひぐちあかね）
１５歳／誕生日３月２０日／身長１６２ｃｍ／体重５０ｋｇ
透子と同じクラスの友人。ぐーたらな透子をいつも引っ張っていく
世話焼きな少女。

第五刺　「夢の中でほっぺをつねってもやっぱり痛い」

「……透子サマ。」
不機嫌そうに透子に声をかけたのは早塚佑人。神門家の主の家系・早塚の次期当主であり、透子の“御主人サマ”である。
「どうしたの、先輩？」
部活の先輩、しかも男子とこれから同居するというのに、透子は随分落ち着いていた。
「どうって……透子サマは知ってたのかよ、このこと。」
少し苛立ったように、佑人は透子に問い質した。
「そりゃあまあ、少しはね。私はそのために小さい頃から槍ばっかり振り回して……本当に可哀想な子供時代……。」
透子はわざとらしく泣く真似をしながら、軽い返事をする。
「お前……ちゃんと説明しろよ！俺は何も知らないんだぞ？あの怪物のことだって……」
ひくつきながら、佑人は彼女の肩を掴んだ。
「もー、気にしない気にしない！こんだけ広い家なんだから、私が増えてちょうどいいくらいでしょ！」
佑人の手を解くと、透子はじゃあねー、と手をひらひら振って去った。残された佑人の表情は……言うまでもないだろう。

二人の同居生活は、そんな調子で始まった。

翌日は土曜だった。佑人が朝起きる頃には、透子は台所に立っていた。
「……透子サマ？」
「あ、おはよーございます、せんぱ……ゆ、佑人サマ？」
「……ヤメロ、恥ずかしい。」
言いにくそうな透子に、恥ずかしい呼び名をやめさせた。

「今日から朝飯は私が作りますからねー。まあ絶対美味いから期待していいですよ。」
味噌汁の味噌を溶きながら、透子はくすりと笑った。
（これが可愛いヤツだったら、俺も少しは幸せって思うんだけどな……。）
佑人は無言で洗面所に向かった。

土曜日の午前は部活がある。しかし、同じ屋根の下暮らすということは、出て行く時間も同じになるわけで……佑人は根は悪くないので、透子とわざわざ登校時間をずらすということはしなかった。
「先輩って意外といい人ですよね。待っててくれるなんて。」
言葉こそ丁寧なものの、透子はかなり失礼なことを言っている。いつものことだ、と自分を落ち着かせて、佑人は答えた。
「まあオヤジに仲良くしろって言われたし……バラバラに出てったらちょっとアレかなーって……。」
透子は満足そうににっこり笑うと、腕を一杯まで伸ばして、２０ｃｍ上の佑人の頭をなでた。
「たまには優しいとこあるじゃん？」
一瞬面食らった佑人だが、頭をなでられたついでに小突かれて、ああやっぱりなと妙に納得した。
（いつもの調子だろ……意識しないしない。）
頭ではわかっているものの、昨日から一緒に暮らしているという事実は、なかなか受け入れ難いことだった。

「……じゃ、ここで。」
学校に着くと、透子は女子の部室へと早歩きして行った。表面上は余裕を見せている彼女でも、やはり気まずさを感じているらしい。
それもそうだ、昨日のあの空気は尋常ではなかったのだから。
「かわいーヤツ。」
透子の後姿を見送って、佑人も男子部室へ歩いて行った。

「……早塚。」
学校周りをランニングし終わり、校門へ入ったところで、佑人は声をかけられた。
「お、どした？」
佑人は上村深雪（うえむらみゆき）—彼の恋人である—の許へ駆け寄った。
「なんか昨日からアンタ変な気がするんだけど……何かあったの？メールも返してくれなかったし……。」
背の低い深雪は、顔ごと上を向いて佑人の顔を覗き込んだ。
（やべ、忘れてた。）
昨日の混乱の中、佑人は携帯の画面に構っている暇などなかったのだ。メールの着信ランプが点滅していることには気付いていたが、彼には返信をする元気が残っていなかった。
「ああ、ごめん。なんでもないよ、ちょっと疲れてただけだから……。」
「でも……っ！」
「悪（ワリ）い、しばらくそっとしといてくれ。」
佑人のそっけない態度に、深雪は不服そうにしていたが、わかったとだけ返事をして行ってしまった。
（あいつ、嫉妬深いんだよな……透子サマと暮らしてるなんて言ったらヤバいだろうな……。まあ、誰にも言うつもりはないけどさ。）
昨日のことも勿論あるが、佑人は最近、嫉妬深い深雪に疲れていた。
（この調子だと近いうちに……。）
溜息を吐くと、佑人も歩き出した。

続

第五刺　「夢の中でほっぺをつねってもやっぱり痛い」（後書き）

上村深雪（うえむらみゆき）
１６歳／誕生日１月６日／身長１５１ｃｍ／体重ひみつ
佑人の彼女。１年生の時から付き合っている。表面上は明るく厳しい先輩だが、佑人の前ではとても嫉妬深い。自他共に認めるツンデレ。

第六刺　「冷たい水は熱く感じる」

「今日こそは説明してもらうからな、透子サマ。」
「……なんですか、先輩。」
日曜の昼下がり、早塚家の居間にて。ちなみに佑人の両親は「久しぶりのデートだわ！」と言いながら、昼前から買い物に出ている。
「……いい加減説明しろよ。もう同居生活2日目だぞ。」
「だから何を説明してほしいんですか……。」
頬杖をついて、透子は欠伸した。
「……わかった。まず、あのバケモノは何だ。」
眉間に皺を寄せて、佑人は透子を真っ直ぐ見つめる。さながら修羅場の恋人同士のようだ。
「あー……そっか、そういや何にも言ってなかったねー。わかったわかった、話すよ。」
透子は大層面倒くさそうだったが、一応話すべきことはわきまえているのだ。佑人は、彼女のそんなところがあるからこそ、彼女のやたら尊大なところも許してしまうのだ。
「化け物の名前は……まあ、吸血鬼（ヴァンパイア）ってとこかな。由来は早塚の“血”を狙ってることから。太陽が苦手ってのもまあ、吸血鬼らしいけどね。だから日没からしか現れないんです。」
「血を狙ってる理由は？」
手を組みながら、佑人は話を促す。
「知るかよ。本人に直接訊けばいいじゃないですか。」
「……了解。じゃあ、透子サマのことについて。」
「……何が。」
透子は首を傾げた。
「全部だよ。」
「えー、めんどくさ……。」
口を尖らせる透子。

「いいから話せって。」
「わかりましたよ……。神門家は早塚の手下。これはわかるでしょ。んで、代々神門の跡継ぎは早塚の跡継ぎをヴァンパイアから護ることになってる。そして、その武器は……――」
透子はジーパンのポケットから、あの銀色の星を取り出した。
「――槍です。」
にっこりと笑って、透子は佑人に星を手渡した。大きさは直径３ｃｍほどか。
「コレが……。」
佑人は星を翳して見た。美しい彫刻が輝く星を模っている。１６本に枝分かれした星光――強いて言うならば十六光星か――が、よく磨かれて、まるで本物の星のように光っている。
「綺麗でしょ？」
はっとした。
星、つまりは槍に見とれていた佑人は、透子に話しかけられてやっと現実に戻ってきた。
「……これ、神門家の家宝とか？」
かなり高価そうなものだったので、佑人は慌ててそれを返した。
「違う違う。槍はそれぞれに合った物じゃないとね。これは私の相棒。」
佑人から槍を受け取り、透子は嬉しそうに笑った。そういえば、彼女が“にこにこ”と笑うところは、あまり見たことがなかった。
「……名前とか、あるの？」
透子の手の中の槍を見ながら、佑人は尋ねた。
「先輩には特別に教えてあげるよ。コイツはね……“シリウス”っていうんですよ。」
「シリウス……か。」
彼女がつけたその名前が、とてもよく合っていたので、佑人は彼女のネーミングセンスはなかなかだと思った。
冬の夜空に輝く青い星。太陽の次に明るく見える恒星。おおいぬ

座のα星。
あまりにも有名なその星を、佑人は思い浮かべた。
「由来は、星型ってことだけじゃないよ。」
「え？」
透子は、少し恥ずかしそうに語った。
「私のご主人様が１２月生まれって聞いてさ。私が中学入ってこの槍を手に入れたときに思いついたんだ。星型の彫刻があんまりにも綺麗だからさ、折角だからご主人様にちなんでやろうって思って。だから、冬の星（シリウス）にしたんだ。私、小学生の時から天体が好きだったから。」
透子は細めの目をさらに細くして、微笑んだ。少し頬が赤いように見える。あれ、ブサイクのくせにちょっと可愛いかも。
（……って、何考えてんだよ、俺……。）
「……へー、そうなの。ありがとね、透子サマ。」
「えっ……。」
透子は少し驚いていた。
「……なんだよ。」
「い、いや……感謝されるとは思わなかったので……。先輩なら、“アホかお前？”で済まされそうだし……。」
「おーまーえー！俺のこと普段からどう思ってんだよ。」
お互いに、自然と笑みがこぼれた。

「ま、今日はこのくらいで勘弁してやるよ。また訊きたい事があったらみっちり尋問するからな。覚悟しとけよ？」
ニヤニヤと笑われて、透子は頬を膨らませた。
「うーわー。嫌な予感……。ま、私も先輩とまともに話せてよかったけど。」
いつもの調子の二人であった。だんだんと“早塚家と神門家の話”から、晩ご飯のおかずだの、数学がわからないだのと話題が逸れていったので、外はすっかり暗くなってしまっている。

その時、透子はヴァンパイアの気配を察知した。透子の表情が険しくなったことで、佑人も異変を感じ取る。
「透子サマ？もしかして化け物が……。」
「あら、察しがいいですね、先輩。さすがです。」
懐からシリウスを取り出す。
「んじゃ、歓迎会でも開きましょうか。」
勢いよく椅子から立ち上がると、透子は居間を出て行った。

続

第六刺　「冷たい水は熱く感じる」（後書き）

吸血鬼／ヴァンパイア

早塚の血を狙う謎の怪物。その生態、目的、誕生など、すべての詳細は不明。ちなみに“吸血鬼（ヴァンパイア）”の名称は、神門の先代（つまりは透子の母である）が勝手に名づけた。

第七刺　「地球が温暖化してるのは応援団のせい」

「先輩、来たよ。件のドラキュラさんたちだ。今回は2匹いる。」
透子はニヤリと笑った。これからの戦いを恐れていないのか。
「……パーティの始まりさ。なんてね。」
椅子から立ち上がる。
「今のセリフ、痛いぞ透子サマ。」
じとーっとした目で透子を見つめる、ご主人様こと佑人。
「なっ……うっせーバカ、ほっとけ。見殺しにすんぞ？」
ぷいっとそっぽを向くと、透子はシリウスを召還した。
「……それさ、なんでそんな伸縮っつか収納？可能なワケ？」
今さら至極当然の疑問を透子にぶつける。危機感ゼロの二人。
「私が知るかよ。企業秘密って職人さんが言ってたよ。てか、いーんだよンなこと一般人（パンピー）が知らなくても。」
少し機嫌を悪くしたのか、彼女はいつもどおり冷たい。
「……悪かったって。しっかり俺のこと護ってよ、透子サマ？」
佑人は焦って彼女に謝った。（めんどくせー女！）
「へっ、言われなくても！」
透子はリビングのドアを開けると、日没直後の庭へと歩いていった。

《早塚の家……ここに早塚の血が……。》
《俺たちには時間がない。時間を手に入れる……早塚の血を……！》
あのおぞましい化け物が二匹、日没直後の紫色の夜空の下、早塚家の庭で蠢いている。彼らの目的は佑人である。
《まずは、あの邪魔な小娘……。》
《殺す……殺す……！》
殺気に沸き立つ怒りに震えた声が、透子の耳元に届いた。
「誰を殺すって？」
殺気を感じた化け物が振り向く。大きな槍を肩に抱えた透子が、吸

血鬼の背後に仁王立ちしていた。彼女は気配を完全に消していたのだ。
《貴様は……！！》
《神門の小娘か……。早塚は俺たちが頂く！》
大きな口をがばっと開け、牙をむき出しに片方が襲ってきた。もう一匹は透子の背後に回り、スキを狙う。
「へえ、作戦立ててるんだ？」
透子はまず、前から襲ってきた吸血鬼に向かって自ら突進した。不意を突かれた怪物。ギリギリのところですれ違い、背後から一閃。
《ぐあああああああ！！！》
怪物の断末魔。リビングにいた佑人の元にも、その声は響いてきた。
「透子サマ……。」

《クソ！》
もう片方が作戦を変更する。片方を倒したばかりの透子にすかさず襲い掛かった。
「あぶねーっつのっ！」
槍の柄で、その鋭い爪を受け止める。力負けして、じゃりじゃりと地面を引きずり押される。
「くっ……！」
壁際に追い込まれ、後がなくなる透子。余裕の笑みを浮かべた吸血鬼。次の瞬間。
「なーんちゃって！」
透子は槍から手を離し、屈みこんだ。吸血鬼は対象を失い前のめりになる。
《うっ！？》
ぐらりと揺れた怪物に、すかさず透子は蹴りを入れる。驚くべき身体能力である。一瞬の出来事に、吸血鬼は追いつけていなかった。
衝撃で力が抜けた吸血鬼から、透子は相棒（シリウス）を奪い取った。
「それじゃあバイバイ。」

吸血鬼の腹部に、ずぶりと槍が突き刺さった。その槍を抜くと、やはり吸血鬼は灰となって絶命した。

「透子サマ。」

騒ぎが静まる頃合を見計らって、佑人は玄関から外へ出てきた。

「ちょっと危なかったけど、おおむねいい仕事したよ。」

透子はにかっと笑ってブイサインを送る。佑人はほっとした様子で笑い返した。

「まあこういうのが毎日続くから、覚悟してね、先輩？」

「……よろしく頼むよ、家来さん。」

まだまだ、キケンな生活は始まったばかりである。

「透子ー！と・う・こ！！」

教室で叫んでいるのは、透子の友人・樋口茜（ひぐちあかね）である。

「ん？んあー、おふぁよう茜……。」

まだ寝ぼけ眼であくびをする透子に、茜は呆れたように頭を軽く叩いた。

「ったく、寝るなら授業中にしなさいよ。放課後に寝る子なんてアンタくらいよ！」

さりげなく学生としてあるまじき行為を推奨する茜に、透子は偉そうに説教した。

「茜……いくら授業中眠くても、ちゃんと聞いてなきゃ先生に失礼でしょうが！」

ビシッと指差す透子に、茜も負けじと答える。

「だったら放課後に寝こけて友達待たせてもいいんかい！部活もう始まるんだよ！」

ぎゃあぎゃあと放課後の教室で騒ぐふたり。一見言い争いでもしているようだが、お互いに信頼している証拠である。透子がこのような口調になるのは、本当に気を許した友人の前のみだけなのだ。もちろん、その中に佑人も入っている。

一方、こちらは弓道場。
「早塚、最近冷たくない？私のこと、もう好きじゃなくなったの？」
道場の外、暗い表情で佑人とその彼女の上村深雪（うえむらみゆき）が話している。
「だから、そうじゃないって言ってるだろ。いい加減にしろよ。」
こんなところで痴話喧嘩とは、誰かに聞かれてもいいのだろうか。
「でも、じゃあちゃんとメールとか返事して……」
「いい加減にしろっつってんだろ。もういい、そういうコトばっか言ってると別れるぞ。」
佑人は随分と苛立っていた。
「ま、待って早塚！」
佑人は部活に参加することなく、帰ってしまった。

「あーあ、あと部活の時間３０分しかないよ。今から着替えてちゃもう時間ないし……今日はサボるかー。」
「って、誰のせいだって思ってんのよ。月曜日は7時間授業でいつもより部活の時間少ないし、冬だから夏より活動時間３０分短いし、アンタは寝てるし……。」
引きつった表情で茜が荷物を持つ。
「まーまー。あんま怒ってると、モテないし、将来シワになるよ？」
ますます茜の神経を逆なでする透子。ピキピキと青筋が浮かぶ。
「うっさーい！」
その時、教室の引き戸が控えめに開いた。
「あ、あの……茜ちゃん、一緒に帰らない？」
そこには、地味だがよく見ると可愛い少女が立っていた。

続

第七刺　「地球が温暖化してるのは応援団のせい」（後書き）

松本江里香（まつもとえりか）
１６歳／誕生日６月２日／身長１５７ｃｍ／体重４２ｋｇ
美少女だが、本人は自分に自信がなく、また地味で目立たないタイプのため告白されたことはない。茜の友人。まだまだ秘密がありそうだが…？

第八刺　「可愛いだけでモテるけど、強いだけじゃモテないという女の悲しい性」

「あの、茜ちゃん、一緒に帰らない？」
控えめに教室の戸を開き、顔を半分だけ覗かせた少女が声をかけてきた。どうやら二人が騒いでいたので、教室に入るタイミングを失ってしまったらしい。いかにも気の弱そうなその少女は、真っ白な顔に自信のなさげな表情を隠すように眼鏡をかけ、整った顔の輪郭を隠すかのように艶やかな黒髪を伸ばしていた。
おとなしそうな子だけど、よく見れば可愛い……いや、彼女がもう少し明るければ間違いなくモテるだろうな……透子の第一印象は、そんな感じだった。
「お、えりかー。いいよ、帰ろっか。」
茜は急に態度を変えると、鞄を掴んだ。透子もそれに合わせて、重い鞄を持ち上げ立ち上がる。初対面の透子に、エリカと呼ばれた少女はおどおどしていた。
（そんな怖がらなくてもいいのになー……。）
透子は複雑な気分になるが、一応仲良くしようと努めてみることにした。
「えりかちゃんだっけ？神門透子っていうの。よろしくね。」
精一杯の愛想笑いを浮かべ、透子はエリカの隣に並んだ。茜もついてくる。
「気をつけなよ～、エリカ？こいつ、部活メンバーにはドS女王様で通ってるから。」
ニヤニヤと笑いながら、茜は透子を親指で指した。
「あっ、てめ、余計なこと言うなって！」
透子は慌てたように、茜の髪をくしゃくしゃにした。江里香はそんな二人を見て、意外にも微笑んだ。
「二人とも、仲いいんだね……。あ、私は松本江里香（まつもとえりか）っていいます。よろしくね、透子ちゃん。」

可愛らしく笑いながらぺこりとお辞儀する江里香に、透子は何か常人とは違うオーラを感じ取った。それは、早塚の血を受け継ぐ佑人にも似た、どこか高貴な雰囲気を漂わせるものであった。
（今のって、まさか……？いや、気のせいだよね。）
透子は自分の感覚に絶対の自信を持っていたが、このときばかりはそれを信じたくなかった。しかし彼女の研ぎ澄まされた感覚は、決して違えることはなかった。
そう、江里香は特別な少女だった――。

教室を出て校門まで来ると、そこには佑人がいた。そう、先ほど彼女の深雪と言い争いになり、勢い余って帰ってきてしまった彼だ。そんなことも露知らず、透子らは佑人に声をかけた。
「せーんぱーい！部活サボりー！？」
心なしか、透子は佑人に会えて嬉しそうだった。茜も佑人の方をニヤニヤと見ている。
佑人は透子の声に気付き、振り返った。駆けてくる透子たち。
「……お、ブサイクじゃん。お前らもサボり？」
いつもの調子の佑人だが、透子はなんとなく彼の異変を感じ取っていた。
「まあ、はい……。でも、ブサイクって言わないでくださいよ、早塚先輩。」
苦笑している茜は、佑人の違いには気づいていないようだった。
「うるさいブサイク。……あれ、友達？」
茜の後ろに隠れいていた江里香に、佑人は初めて気付いたようだった。男が苦手なのか、透子の時よりもあからさまにびくびくしている江里香。
「そうですけど、江里香（このこ）をあんまり怖がらせないでくださいねっ。」
江里香を庇うように、茜は佑人に釘を刺した。隣でうんうんと頷く透子。
「なんだ？自分がブサイクだからって、お前ら嫉妬か？」

佑人は二人の頭を撫で、江里香を一瞥した。
「江里香ちゃん、コイツ……早塚先輩は先輩の風上にもおけないサイテーなヤツだから、相手しちゃダメだよ。」
透子は妙につっかかった。佑人は少しむっとする。
これが、佑人と江里香の出会いだった。
このとき透子は、なんとなく予感した。そう、先ほど江里香に感じたあの感覚（オーラ）……あれを確信したのだ。
（そうか、この二人は……。ま、ある意味お似合いかな。最近深雪先輩とあんまり上手くいってる様子ないし……時間の問題ってヤツか……。）
胸の奥にチクリと感じた痛みを、透子は気付かないふりをしてやり過ごした。注意して見てもわからないほど、ほんの微量、悲しげな表情を浮かべた透子に気付く者は誰もいなかった。

続

第八刺　「可愛いだけでモテるけど、強いだけじゃモテないという女の悲しい性」

県立四方南（よもみなみ）高等学校
普通科高校。可もなく不可もない、という程度の公立高校だが、交通の便がいいため県内の各地域から生徒が通っている。名物は妙にランニングの厳しい体育の授業。

第九刺　「サブタイトルってたまにダサい」

透子、佑人、茜、江里香の四人は、同じ電車に乗っている。一人は（心なしか）忌々しげに、一人はぼーっと、一人は楽しそうに、そしてもう一人は緊張しているようだった。はたから見ればどこか異様な高校生四人組だったろう。

「――それでね、先輩ってばウチらのことといっつもバカにしてきてさー……」

茜は江里香に佑人のこれまでの悪行を洗いざらい説明している。それにたまに相槌を打つ透子。どう反応していいか困っている江里香。

「おめーよ、人のこと好き放題言いやがって……。大体俺は、お前らブサイクはきらいだけど可愛い子には優しいんだよ！」

「あっ、てめそりゃないよー。」

佑人をぽかっと殴る透子。

「いてっ。」

透子は彼をじとーっとした目で睨む。江里香はおろおろするばかり。

「……ははーん、透子サマ。江里香ちゃんが可愛いからって嫉妬か？かまってほしいのか？うん？」

ニヤニヤしながら佑人は透子の頭を撫でた。

「えっ。」

“可愛い”という言葉に江里香は（彼女にしては）大きく反応した。

三人が一斉に彼女を見る。

「あっ。えっと……。」

江里香は顔を真っ赤にして俯き、押し黙ってしまった。

「……うわー、可愛い。」

佑人は嬉しそうに笑った。

（やだ、また……？）

透子は胸を刺す痛みを再び感じた。

（駄目だよ、私には――）

茜は、なんとなく彼女の変化を感じ取っていた。
透子と佑人が同じ駅で降りて、電車には茜と江里香が残った。
「ねえ、江里香さ。」
電車のドアにもたれて、茜はおもむろに口を開いた。
「なあに？茜ちゃん……。」
江里香はいつもと雰囲気の違う友人に、少し不安げな表情を浮かべた。
「先輩のこと好きになるのは自由だけど……あの人、彼女いるからね。」
茜は江里香を横目に見遣った。みるみる彼女の顔は赤く染まっていく。
「えっ。な……何いってるの茜ちゃん！そんなことあるわけないよ……。」
江里香は嘘が下手だった。
「……それに、たぶんライバル多いよ。先輩、見た目通りモテるからさ。」
茜は携帯を開いた。
「じゃ、一応言っといたから。がんばんなよ、江里香。」
江里香は何も言えなかった。
「――でも私は、あくまで中立の立場で応援するから。恨みっこなしね。」
友人の意味深な言葉を、江里香はどう受け取れば良いか一晩悩むこととなる。

「――先輩。」
早塚家の最寄り駅の改札口。透子と佑人は並んで歩いていた。
「ん？」
いつもと違う覇気のない透子に、佑人は違和感を感じていた。
「江里香ちゃんと仲良かったね。」

透子は力なく微笑む。
「んー。可愛い子とはすぐに仲良くなりたいやん？」
佑人は少し、彼女に意地悪をしたくなった。だが――
「……だろうね。」
（透子サマ……？）
明らかにいつもと違う。いつもならこんなくだらない憎まれ口に、全力で暴言暴力を振るうのに――
「あれ、妬いてくれないの？」
佑人は、もう一度からかうように言った。
「あーもー。バカなこと言わないでください！」
……いつもの透子だ。
（気のせい？）
佑人は、一つの懸念をもみ消した。

「――！　あれは……。」
冬の早い日没の中、雑踏に紛れる透子を見つけたのは、茶髪にピアスをした少女――

続

第九刺　「サブタイトルってたまにダサい」　（後書き）

神門（みかど）家

早塚家を代々護る槍使いの家。早塚の次期当主を１７歳から成人になるまで守護する義務が課せられる。しかし、２０歳未満の神門家の者は、決して恋をしてはいけないという掟があった――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5921p/

槍刺相愛

2011年10月8日12時47分発行